

安部公房の読者のための通信 世界を變形させよう、生きて、生き抜くために！



月刊

もぐら通信

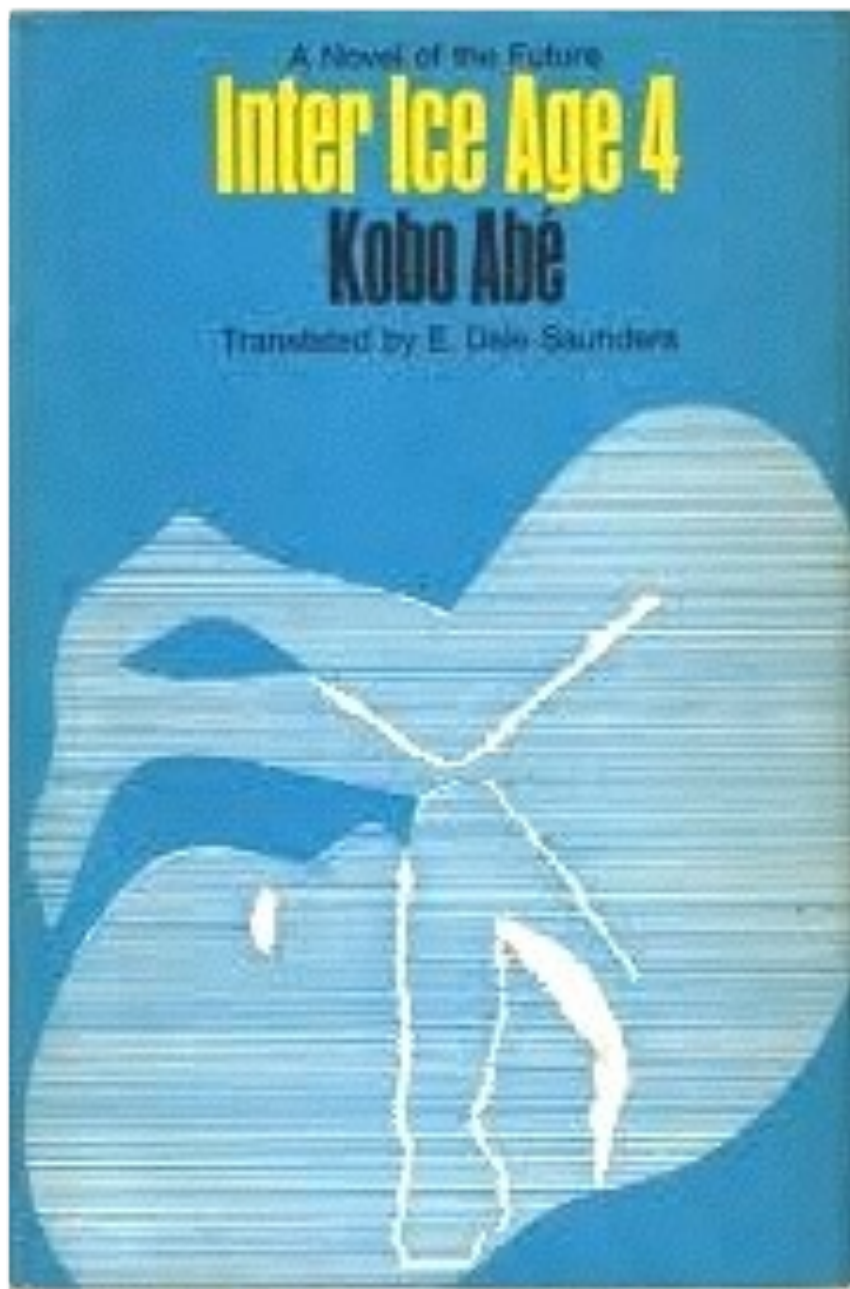
Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2014年6月30日初版 第22号

www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ：
迷う事のない迷路を通して
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい



英語版『第四間氷期』

ニュース & 記録

(<http://seesaawiki.jp/w6allen/>)

1. 兵庫県伊丹市にて、『友達』が上演されます

兵庫県伊丹市にある、AI・HALLの現代演劇レトロスペクティヴという企画において、『友達』をsundayという大阪の劇団が上演されることになりました。

本誌編集部が、演出を担当されているウォーリー木下さんたちにインタビューをしてきました。今号にその記事を掲載しています。なお、これが機縁となり、公演のパンフレットにもぐら通信からの寄稿文が掲載されます。

また、7月13日(日)16時公演終了後のシアタートークでは、安部公房の戯曲の演出を多数担った大橋也寸さんをお迎えして、氏の横顔に迫るとのことです。さらに、7月14日(月)の千秋楽には、作家福永信さんが、トークゲストとして来られます。

詳細は以下の通りです。

sundayホームページ：<http://sunday-go.jp/tomodachi/index.html>

[日時]

2014年

7月11日(金) 19:30

7月12日(土) 15:00/19:30

7月13日(日) 11:00/16:00

7月14日(月) 15:00

※開場は開演の30分前、当日券の販売は60分前

※未就学児童の入場はご遠慮ください。

[会場]

AI・HALL (伊丹市立演劇ホール)

〒664-0846 伊丹市伊丹2丁目4番1号 Tel. 072-782-2000

JR伊丹駅より西へ徒歩すぐ、阪急伊丹駅より東へ徒歩7分

[料金]

全席指定・税込

一般：3,500円

高校生以下：1,500円

シニア（60歳以上。当日、要証明書）：2,500円

※当日券は、各500円増しとなります。

”友達”割引（sunday前売のみ取扱）

3人以上 → 1人 2,500円

9人以上 → 1人 1,500円

<http://www.aihall.com/retro/sunday/stage.html>

2. 福岡伸一さんの毎日新聞の記事

6月15日の毎日新聞にて、生物学者福岡伸一さんが、「昨日読んだ文庫」と題したエッセイを書かれています。『新潮』2月号に掲載された杉本博司氏の作品についての書評です。その中で、福岡氏は、星新一的ショート・ショートスタイルであること。そして、安部公房の『第四間氷期』を想起したと書かれています。

3. 池田龍雄さんの「わたしの百物語」連載中

安部公房の朋友で、画家の池田龍雄先生の記事「わたしの百物語」が西日本新聞で4月15日より連載されています。

<http://c.nishinippon.co.jp/announce/2014/04/post-296.html>

4. もぐら通信が、国立国家図書館サーチで、検索できるようになりました。表題どおり、検索できるようになりました。但し、閲覧は国立国会図書館内に限られます。

<http://iss.ndl.go.jp/>

目次

- 1。ニュース&記録…page 2
- 2。目次…page 4
- 3。鈴木秀太郎と小説『紙片』：宮西忠正…page 5
- 4。掌編小説 水たまり：多麻乃美須々…page 10
- 5。sunday訪問記ー友達を探してー:編集部 岡…page 13
- 6。私の本棚より：『ユリイカ』（平成6年8月1日発行）：
タクランケ…page 22
- 7。質問箱…page 29
- 8。安部公房のアメリカ論 ～贋物の国アメリカ～：
岩田英哉…page 30
- 9。もぐら通信の編集部員を募集します…page 52
- 10。ご寄稿に際してのお願い…page 54
- 11。前号訂正箇所…page 55
- 12。読者からの感想…page 56
- 13。合評会…page 60
- 14。本誌の主な献呈送付先…page…60
- 15。本誌の収蔵機関…page 60
- 16。編集方針…page 60
- 17。個人情報保護方針…page 60
- 18。バックナンバー…page 60
- 19。もぐら通信のwiki…page 60
- 20。編集者短信…page 61
- 21。編集後記…page 62
- 22。次号予告… page 62

お知らせ：電子媒体(PDF)で閲覧されている場合、ツールバーにページ数を入力して検索すると、恰もジャンプ・シューズを履いたかのように、そのページにジャンプします。

鈴木秀太郎と小説『紙片』

宮西忠正

安部公房は1949（昭和24）年4月、関根弘、桂川寛、樗沢（瀬木）慎一らと若い芸術家のアヴァンギャルド芸術運動体として〈世紀の会〉を発足させた。〈世紀の会〉では会員紙《世紀ニュース》を発行し、ほぼ隔週、法政大学（飯田橋下車）第一校舎18番教室や第二校舎50番教室などで研究会を行なった。1950（昭和25）年秋には、ガリ版刷りの小冊子〈世紀群〉を発行した。その第1冊目は、花田清輝訳の『カフカ小品集』、2冊目は、鈴木秀太郎の小説『紙片（かみきれ）』であった。

鈴木秀太郎は、1932（昭和7）年8月29日、東京都三鷹生まれ。当時、都立立川高校の学生で、東京大学の理系の学部を目指していた。鈴木が〈世紀の会〉に入会した時期は定かではないが、会員証の会員番号は「1010」となっている（註1）。あるいは、1949（昭和24）年10月10日に鈴木は〈世紀の会〉に入会したのであったかもしれない。

◇『紙片』の体裁

B5版、謄写版印刷、本文33字詰め13行取り、45ページ。装丁・挿画：大野齊治（2色、5色刷り・貼り込み）。扉、別丁。ホッチキス綴じ。表紙、3色刷り。投げ込み：安部公房「『紙片』のこと」（4つ折り1枚）

奥付はないが、投げ込みの安部公房の「『紙片』のこと」の末尾に「（一九五〇・一〇・二八）」と執筆年月日の記載があるので、1950（昭和25）年10月、あるいは11月に発行されたものと推察される。

なお、同年6月、〈世紀の会〉の会員紙として活版刷り8頁の《BEK》1号が発行され、そこに「城崎誠」の小説『紙片（かみきれ）』が掲載され、末尾に（未完）、通信欄に「第3部執筆中」と記されている。「城崎誠」は鈴木秀太郎のペンネーム。その後、加筆して〈世紀群〉の1冊として発行されたものと見なされる。

◇『紙片』の梗概

機械技師の男が、世界を統一する壮大な歯車を設計している。機械は人間以上の美と精神を持った有機物だ、と技師はP公園のベンチに座って、頭の中で、設計した歯車を動かす。ところが歯車の減速装置は作動せず、回転速度を増大させると、歯車の擦れ合う甲高い音が技師の頭をキリキリと苛みはじめる。

男の足元には、土に汚れた小さな紙片が落ちていた。そこには、妻との日常が綴られている。妻の手鏡が揺り起こしにきて不眠症にかかった。だが戦いの末、手鏡をおとなしく手なずけることができるようになった。だが、その戦いは、散々になぶられ、だんだんと自分という存在をすりへらしていたに過ぎない、と男は気づく。この進歩と退化の必然は、不安の渦を巻いて人々を呑みこんでしまった。ある人々は、この不安から逃れようとして、自分の不安をいよいよ増大させ、いくつもの顔と仮面と手をもつ存在に分裂する。しかし進歩の強引な力は止まることを忘却して、ますます速度を増大させるばかりだ。錯乱と錯迷の世界がここにある。

隣家には絵を描き歌を唄うだけの老人が、卑屈も嘲笑も仮面もない、本性だけに生きている。紙片の筆者は、いつしか青い虫になり、油菜の葉っぱを食べて眠りにつく。

男は紙片を置いて立ちあがり、歩きはじめる。手と胴と頭と顔と足が山の向こうから飛んできて合体すると、エドガー・ポーにそっくりである。ポーはフロックを着こんで真理について語りだすが、目だけを残して消滅し、ついで目も消滅する。

雑木林を過ぎると、マルテに出会い、マルテとともに山上の音楽家を訪ねる。音楽家はライオンと天使を友とした至福を語る。

マルテと別れて海辺に出ると、浦島太郎に出会う。浦島は言う、俗界とはいかに虚偽と欺瞞に充ちたものであるか。そこは媚態の動物がうようよと動きまわっているところ、少数の人が多くの利を得て、多くの人々をその日暮らしの病禍の中に突き落としているところ。それに対して、竜宮には整然とした秩序があり、人間の本性のみによる自由行動者でありうる。その自由とは、本性を描く芸術においてのみ表明しうるのです……

男は浦島に案内された竜宮で山海の珍味を味わいベンチに横になる。P公園のベンチでは一人の男が顔をかかえたまま冷たくなっている。

◇『紙片』と安部公房

「北多摩郡三鷹町上連雀八七四 鈴木秀太郎様」宛、「文京区小日向台町一ノ三〇 安部公房」発信の「12.21」消印の封書が残されていた（註2）。年度は不明だが、1950年10月に安部は文京区小日向から茗荷谷へ転居しているのので、手紙は1949（昭和24）年12月21日付と推察される。また、文中の「作品」とは、鈴木の小説『紙片』のことであると見なすことができる。

〈作品、拝見しました。

実にすばらしい作品だと思ひます。

近頃、こんなにたのしい気持で読んだものはないといってもよいくらひです。

こうした明快さは、たしかにぼくらの年代でなければ持てないものでせう。一人の大きな味方を得たような、力強い気持です。

どうか、この態度をいつまでも保っていつてもらひたいと思ひます。君ならばそんな気づかひはないと思つてゐますが、とかく日本の文学（芸術と言はれるいろいろな概念）に接近すると、駄目になる人が多い。君のやうな芸術は、

（ぼくと同じやうに）人からとかく悪く言はれることと思ひますが、そうした外部からの圧迫に絶対くじけないように。

現実を見つめ、見ることを学び、存在を解釈すること、それだけがぼくら（実存的）芸術するものの唯一つの方法です。〉

また、投げ込みの「『紙片』のこと」では安部公房は次のように評している。

〈生れようとして、まだ生れていない卵は、混沌の中にあるとしても、それは無比の明快な形体をもっている。いわば、そのような明快さが、この小説の与える印象であろう。単純で、明るくて、そして翻訳不可能な言葉——例えばミロの絵がそうであるように、物が物自身の言葉で語りだし、したがって、既成概念におきかえて意味づけることの全く無駄な、ただ耳を傾けてきく以外に方法のない言語、——生きた現実が、その中にある存在に直接語りかける方法である。〉（全集. 第2巻346—347p)

安部公房が『壁—S・カルマ氏の犯罪』を脱稿したのは、1950（昭和25）年3月5日であり、『紙片』に（ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』と同じように）触発された可能性をうかがうことができるだろう。また、機械が有機的な存在であり、それ自身の精神を持っているといった鈴木認識と発想は、公房

の『R62号の発明』（1953.3文学界）などに結びついた可能性も類推させる。

◇鈴木秀太郎の思索の跡

鈴木秀太郎は東京大学受験に失敗したあと、1953（昭和28）年、東北大学理学部物理学科に入学した。

1958（昭和33）年、東北大学を卒業、日立製作所に就職し、茂原工場に、1962（昭和36）年、同社の中央研究所（国分寺）でブラウン管など蛍光物質の開発研究にたずさわっていたが、1973（昭和48）年11月8日、癌のため亡くなった。41歳であった。

没後の1977（昭和52）年4月、東北大学時代の友人で工学博士の相原秀行氏によって、『鈴木秀太郎遺稿集（一）——総合世界観試論——』が非売品として編集・出版されている。これは、鈴木が相原に送った書簡をまとめたもので、「第1章 総合世界観の意義」以下、数学、物理学、生物学、技術論、進化論、言語学、論理学、哲学、文学はじめ、芸術、宗教、歴史学、経済学に至る人間活動についての幅広く真摯な思索の跡である。

大学時代の鈴木は、原水爆禁止運動や大学祭、読書サークルなどにリーダー格として活動した。卒業後の1961（昭和36）年、鈴木は相原はじめ学生時代の仲間によびかけて読書サークルを行なっている。「安保改定反対運動の挫折感（？）の空白期を埋める意味もあった」と相原は回想している。

「戦後われわれが見てきたり、やってきたものは果たして本当の研究だったのか。実際はこの自然または物質または“ものそのもの”または本質、または全体の究極的な根元等に対決するという研究は一つもなかったのではないか。（中略）これからの研究は、分析への努力ではなく総合への努力として発展すると思います。その観点からある一つの分野に努力すると同時にそれを哲学的な統一的な位置での考察を行うべきではないかと思います。」（相原宛、鈴木書簡）

この分析から総合へといった思考回路は、安部公房の思考回路と繋がるものであるかもしれない。

「第2章 人類の進化と言語の問題」（1964or65）の最後に、鈴木は「勉強するもの」として以下を掲げている。

「数学基礎論、論理数学、ラッセル、量子量と数学の関係、ノイマン、ハイゼンベルグ、分子生物学、分子遺伝学、情報理論、人間工学、世界経済と世界政治、資源論と世界地理、大脳と言語、数学と脳の構成、電子計算機、技術論、現代の科学論、ソ連の哲学」

ちなみに安部公房が、米ソ対立の時代のなかで、コンピュータや遺伝子改造による水棲人間を描いた『第四間氷期』を執筆したのは1958（昭和33）年から1959（昭和34）年にかけてであるが、遠く安部公房の活動に啓発されて、鈴木は科学者として思索を深めることを止めなかったようである。

（註1、2）鈴木秀太郎夫人の元に、〈世紀群〉や安部公房書簡、後出の『鈴木秀太郎遺稿集（一）——総合世界観試論——』と共に残されていた。筆者は神田神保町・田村書店の好意により閲読を得た。



水たまり

多麻乃 美須々

あの水たまりは干上がらない。湧き水があるのだと言う奴もいるけれど、水が溢れ出すわけでもない。噂では、長靴をはいた小学生が両足で飛び込んで、腰まで沈み大騒ぎになったらしい。

そんなに深いのだろうかとある日、棒を突き刺したが底はかちかちで硬く、深いところでせいぜい五センチくらいしかなかった。噂は所詮噂だ。でも、なぜ水は干上がらないのだろうか。近くに川もなく、田んぼもなく、私の家の前にあるただの舗装されていない道のへこみにできた水たまりに過ぎない。


最初はそれほど気にならなかった。ところが、あの水たまり、やはりただ者じゃなかった。

玄関先でぼうっと立っていたときだ。猫がその水たまりの水を飲んで、塀にすばやくよじ登った。いつもの風景だ。でも、少し違った。猫が塀の向こうに消えたと思ったら、その水たまりから浮かぶように飛び出してきたのだ。目を疑ったが、今度はいれ替わるように、犬がその水を飲むと、水たまりに飛び込

んだ。気持ちよさそうに背を水たまりの底にこすりつけていた。すると、そのまま水の中に沈んでしまった。急いで駆け寄って、水たまりの中を見たけれど、透明な水の底に小石がいくつも沈んでいるだけだった。恐る恐る足を突っ込むと、下駄の歯が濡れただけだった。どうやら昨晚の深酒のせいだと頭を叩きながら、玄関に戻るとその消えた犬が寝そべっていた。

「そうだ。あの水を飲まないとだめなんだ」と思い、水たまりのところに行き、片手で水を掬い、口にした。そして、水たまりの中に両足でぴよんと入ると、ただ少しばかり水が飛び散るだけだった。なぜ猫が飛び出し、犬が消えたのだろう。大きいため息をついて、夏の青空を見上げたら、いつの間にか太陽が照りつける屋根の上に立っていた。






ご寄稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたのご寄稿をお待ちしております。

安部公房についての、どんな文章でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、下記のメールアドレス宛にご連絡下さい。



次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

sunday訪問記ー友達を探してー

編集部 岡(wlallen)

第1部：ウォーリー木下さんたちへのインタビュー

兵庫県伊丹市にあるアイホールを訪れ、sundayの演出家・ウォーリー木下さん並びにスタッフの間屋口克さん、若林康人さん、尾崎雅久さんとテーブルを囲み、インタビューをすることができました。

12時にお約束していましたが、私が早めに到着したので、スタッフの方たちとしばしの間、歓談していました。その後、ほどなく、ウォーリー木下さんが来られました。

以下、敬称略で記載します。

岡：私の方から自己紹介をさせていただきます。

私は安部公房ファンで、約15年前、『砂の女』を読み、これは他の作家にはないものを持っている小説だと思い、はまってしまいました。ホームページを作ると、割と反響が有り、インターネット上につながりができ、読書会を開催していました。

たまたま、東京から読書会に来た岩田と意気投合し、1年半ほど前からネット雑誌「もぐら通信」を発行することになり、今に至ります。

木下：「もぐら通信」は、何度か拝見させてもらいました。「もぐら通信」を始められたのは、意外と最近なんですね。安部公房のファンサイトとしては、最も規模が大きいのですか？

岡：ええ、そうだと思います。

岡：ウォーリー木下さんは、神戸大学在学中に、劇団を立ちあげられたそうですね。プロジェクトマッピングを利用されたり、台詞を使わないパフォーマンスを創るなど、新しいスタイルの演劇を上演されているとお聞きし、興味を持っています。

木下：普段は、演劇は見に行かれますか？

岡：安部公房の演劇しか見ないです。東京での上演が多いので、なかなか見に

行けません。

木下：関西で、安部公房の演劇は上演されることはないのですか？

岡：数年前、同志社大学で『友達』が上演されたくらいだと思います。

（註：2002年に鴻上尚史演出の『幽霊はここにいる』の大阪公演を見たことを失念していました）

木下：東京での上演は多いんですか？

岡：去年は、没後20年ということで、『友達』も多数、上演されました。笛井事務所、新宿サニーサイドシアター、野沢那智さんが設立されたPAC、CHAiroidPLIN（ダンスグループ）などで上演されました。公演が多くあったのは嬉しいですが、見に行けなかったのが残念でした。今回、やっと関西でやってくれるので嬉しいです。

木下：有名な戯曲ですが、意外と、『友達』が戯曲だとは知られていないようにも感じます。今回も、「安部公房をやります」というと「小説を上演するんですか」と聞かれたり。

岡：安部公房の仕事は、演劇はもちろん、ラジオドラマ、テレビドラマの脚本もあり、多岐にわたっています。小説だけでなく、それらにスポットライトを当てていく必要があると感じています。

岡：なぜ、安部公房作品を選ばれたのですか？ その中でも『友達』を選んだ理由は？

木下：高校生や大学生のころ、安部公房の小説を何冊か読んでいました。その時は、すごく面白かったのですが、怖さの方が伝わってきました。作品の奥行きまでは当時はわかりませんでした。読んだ感触は強く覚えています。『砂の女』と『箱男』は、特に気になって、2～3回読み直しました。ただ、それから長い間、読むタイミングがありませんでした。

1年半くらい前、講師をしていたワークショップで、参加者に好きな戯曲を持って来てもらったんです。たまたま、その中に『友達』がありました。その時、皆で声に出して戯曲を読んでみたんですが、参加者が読んだ『友達』は、リズム感があって、演劇としてのテンポが良くて、すごく面白かったんです。去年の秋にアイホールさんから、「現代演劇レトロスペクティブ」に参加しないかと打診をいただきました。「現代演劇レトロスペクティブ」は、1960年代以降の日本の現代演劇戯曲を上演する企画だったので、上演を希望する戯曲と

して『友達』を挙げさせていただき、実現に至ったわけです。こう考えると、割と色々な偶然が重なっていますね。

でも、それまでもカフカやベケットなど、いわゆる不条理劇と言われる作家さんの作品は演出してきました。

それに、ポール・オースターなども大好きです。ポール・オースターは安部公房に影響された作家と言われていますが、逆に、カフカやベケットは、安部公房が熱心に読んでいた作家ですね。こういった系譜の作家の作品が、自分の中では興味があります。

岡：ポール・オースターのニューヨーク3部作と安部公房の『燃えつきた地図』は似ているという指摘がありますね。

木下：『燃えつきた地図』にもみられる失踪というテーマは、安部公房にはよくありますね。

岡：『砂の女』もそうですね。『箱男』もそれにあたると思います。

木下：実存主義という言葉もありますが、演劇をやっていると、「自分が何であるか」とか、「認識や存在」については、自然と関心が高くなりますね。

岡：ワークショップで戯曲を読まれるまで、ウォーリー木下さんは『友達』の上演をご覧になったことはありますか？

木下：見てません。ただ、チェルフィッチュの岡田利規さんがエッセイ集を出版されていて、その中で2008年の世田谷パブリックシアターで上演した『友達』についての文章は読んだことがあります。それと、『友達』については、別役実さんが『言葉への戦術』という本の中で長文の批判を展開しています。これも読んでいます。

岡：別役氏の批判は、原文を読んでないですが、ある意味、安部公房への評価の裏返しではないかと思います。

木下：そういう面もあると思いますよ。

(註：面白いことに、アイホールでは、8月に別役実さんの演劇を上演されます。)

木下：上演に際しては、劇作家によっては、「好き勝手に変えていいよ」という人もいれば、「一言一句、絶対変えてはいけない」という人もいます。いろんなパターンがありますね。今回は戯曲を重視して作品を作っています。戯曲を変えるのではなく、演出によって自分の作品にしていきます。

演出の方法の一つとして、主人公の男は長谷川寧（富士山アネット）というダンサーをお願いしています。

岡：「身体性を重視する」というのは、安部公房スタジオの「肉体を鍛えよ」という考え方に通じるものがあると思います。

木下：安部公房の演出でも身体性は重要な要素の一つですね。当時の安部公房スタジオの俳優さんの言葉、当時の稽古場のレポート、上演記録を読むと、かなり実験的な試みがあります。そういった身体性を重視した舞台の魅力が今回の上演でも伝わればいいなと思っています。

岡：『イメージの展覧会』の『仔象は死んだ』の上演を映像で観ましたが、セリフがほとんど無かったです。前衛的、先進的すぎて、私にはちょっと難しかったですね。

また、『棒になった男』 第二景「時の崖」での上演映像も見ました（井川比佐志さんが主演です）。トレーニングの映像と試合のシーンが交互にあって、試合に負けていくボクサーを井川さん一人で描いている作品です。

木下：安部公房の作品は密度が高いですね。『友達』も、言葉がびっしり詰まっています。ですが、その隙間や行間に実験的な視点を入れたいですね。

岡：7月13日（日）16時の公演では、大橋也寸さんが終演後にシアタートークに出られるんですね。大橋也寸さんはどういう経緯で、トークゲストとして招かれたのですか？

尾崎：「現代演劇レトロスペクティブ」では、初演の上演に関わった方や、当時の状況をご存知の方を終演後のシアタートークにお招きして、お話をいただいております。今回、大橋さんをお願いしたのは、安部公房作品の演出経験があり親交もおありだった。その上、大阪出身で近畿大学の教授も務めてらして、関西とゆかりが深いこともあり、お招きしました。

岡：『友達』といいますと、尼崎事件の時にも話題になりましたね。他人の家に乗り込んで、家人を監禁して、その人の資産を奪うという事件のあらまは、『友達』と同じ構図です。ここらへんに安部公房の予見性が見られて面白いと思います。その点をお聞かせいただけますか？

木下：尼崎事件は、家族という集団の特殊性がありますが、その前にもオウムや天下一家の会の事件など、集団に呑みこまれる個として考えると、昔から

あることのように思います。

少し話が変わりますが、僕が最も衝撃を受けた事件は、豊田商事の社長刺殺事件なんです。まだ小学生でしたが、かなりのトラウマになっています。

トラウマになったのは、「人が目の前で殺されているのに、助けない人たちがいるということです。テレビカメラを向けながら、殺されている人を傍観して助けないということが、大きなショックでした。

でもこれは、個々の人間というより、システムの問題だと思います。マスコミというシステムの中で彼らに与えられた仕事は、殺人を止めることではないのです。

カメラマンに非はないと思いますし、悪意があったとも思えないです。また、彼らが、常日頃、暴力性を望んでいるタイプの人間だと思わないし、普通の人間だと思います。いちばん怖いのは、自分がカメラマンと同じく、システムの中で思考停止するのではないか、ということです。

善悪を超えた何か大きなものが社会にはあって、もしかしたら、『友達』は「人間がムラという社会を作ったときから、自然と生まれてしまった何か」を描こうとしたのかもしれないかもしれません。それなら、先見性というよりは、普遍性を持ったものを描こうとしたのかもしれないと思います。

今回の作品では、いつだって、私たちはシステムの側であり、システムに殺される側である。それを意識して作品を作っています。

岡：近代や現代はシステム化されて、自由に生きられず、息苦しいですね。

木下：『友達』のラストシーンは、すごく辛いシーンだけど、美しくも見えます。僕は「システム」と「個」は、「絆」と「自由」にも置き換えられると思いますが、最後は「自由」を手に入れるという象徴にも見えます。

岡：家族が自由を手に入れたのですか？

木下：いえ、男がです。

岡：死んで自由を得たということですか？

木下：はい。一つの解釈に過ぎませんが、男は、自由を得て死ぬ。

次女は、なぜ鍵を与えようとして、殺したのかを考えると、「鍵を手に入れる＝自由を得る＝死ぬしかない」という美しい皮肉にも見えます。

岡：そのような解釈は、私にとっては新鮮です。

木下：解釈は一つである必要はないと思います。例えば、ダンスは、なんとでも解釈できる一枚の絵のようなものです。鑑賞者の頭のなかに生まれたもの

が最適解だと思います。

演劇もそうあるべきだと思います。観客は、それぞれの答えを持てばいいのです。

百人いれば、百通りの解釈をしてほしい。そうでなければ、二ヶ月もの間、一所懸命に稽古して作品を作っている意味がありません。

岡：百人いれば、百通りの解釈なんですね。

木下：最初に家族は、「仕事に行かなくちゃ」という台詞で始まる。この始まりが好きなのです。

彼らは、「仕事」をしに、男の家に行く。悪いことだと思っていない。

彼らは殺人者集団ではない。殺すことが目的ではない。どちらかと言うと、彼を救いに行くんです。

岡：作品中に、「治療中」という表現が出てきますね。

木下：主人公のほうがすごく病んでいる可能性もあります。家族は悪者ではない。

家族を悪者として描くと、「社会のシステム側が悪、個人が善」という考え方が強く出るような気がしています。そういう作品にはしないと決めています。

だから、いろんなイマジネーションが見た人たちの中に湧いてくるためにも、家族側にスポットライトを当ててみたいですね。

岡：とても面白い着想ですね。『闖入者』から読むと、男に自分を重ねて、あんな家族に押しかけられたら怖いなあ、とそういう怖さしか、私には無かったです。

木下：純粋な発想で上演しても面白いとは思いますが、しかし、劇を見終わって終わりではなく、家に持ち帰ってまだ考え続けるくらいの演劇としての厚みを出したい。そのために、いろいろな角度から作品を見たいですね。

岡：記憶違いかもしれませんが、清水邦夫さんの作品で、記憶喪失の主人公を連れ戻しに家族がやって来る話がありました。（註：後日調べたところ、『青春の砂のなんと早く』という作品のようです。）

木下：面白いですね。『友達』もそのようにも読めますね。

岡：（インタビュー前は）人間の悪魔的部分・黒い部分を見せて欲しいと思っていましたが、先ほどの話を伺うと、違うようですね。

木下：ええ、違います。暴力性、例えばレイプシーンは、映画ではリアルに表現できますが、舞台上では難しいですね。レイプしていないのがわかってしまいます（笑）。

ただ、そこには演劇ならではの方法があります。リアルなものよりも、より気持ち悪いものを感じ取ってほしいです。男や家族というより、人間全体が持っている黒い部分に繋がるものは見せたいと思います。

岡：配役やオーディションについて、お聞かせください。

sundayの役者が5人起用されて、オーディションで5人起用されたと聞きました。

主要な役はsundayの方ですか？

木下：いえ、違います。バラバラの配置です。また、それ以外にも、ゲスト出演の方もいます。

岡：オーディションの選考基準を教えてください。

木下：オーディション当時はどういう演出をするかはっきり決めてなかったの
で、『友達』を読んだ人が、何のひねりもなく、この人が長男、この人が次
女などの配役がすぐ分かるくらいのわかりやすくイメージできる役者を選び
ました。

岡：『友達』を作るにあたって、参考にされたものはありますか？

木下：いえ、私のやり方は、ワークショップで、俳優とともに考えていくもの
です。

参考にしているとすると、みんなの発想です。

ピラミッドの上から指示するタイプの演出家ではないですから。

岡：トップダウンではなく、ボトムアップですね。

木下：今回は、音楽も生演奏で、即興演奏やボーカルもあります。

岡：生演奏ですか！

木下：音楽の人たちの発想もかなり作品に反映されています。

岡：同志社大学での上演はユニークでした。360°の円形舞台で、「予約席」に
家族が座るなどの趣向が有りました。携帯電話を使っていたのが、現代風に
アレンジしているのかと思いました。

木下：今回の上演では、携帯電話を使っていません。昭和風でもないです。架空のどこでもない国をイメージして、どこの国や時代にでも見えるように作っています。

岡：戯曲は新潮文庫版を使われているのですか？

木下：はい、そうです。再演のときのものです。

安部公房は作品にかなり手を入れますが、多くの作家は、一度書き上げたものになかなか手を入れません。でも、演出家は次々に変えることができます。これまで、『ゴドーを待ちながら』を複数回上演しましたが、いろんな演出をしてきました。『ゴドーを待ちながら』を二人芝居として上演してもいいですし、十人が登場する群像劇として上演してもいいのです。だから、もう一度、『友達』をやるとすると、どう演出するか分からないです。

「ウォーリーは、『友達』をどう思っているんだ」とか「解釈が定まってないのか」と言われるかもしれないですが、それが私のスタイルなのです。作品に対する過剰な思い入れは、敢えていれません。

岡：一度上演したら、壊してまた作る、つまりスクラップ・アンド・ビルドということですね。

木下：それが、演劇の仕事の面白いところだと思います。

岡：最後に、上演に際しての意気込みや、みどころを教えてください

木下：もう充分喋ってしまったような気がしますが（笑）

まずは、安部公房さんの名前を知っているけれど、まだ読んでない方にも、観に来て欲しいですね。この作品が入り口になって、興味を持ってもらえるとうれしいです。このインタビューを読んでいただいて、ピンときた方は、是非観に来て欲しいです。

演劇は、戯曲、音楽、ダンス、色んな物の総合芸術なので、それらが一つになっているところが見どころです。

岡：ありがとうございました。

その後、私とウォーリー木下さんの二人の記念写真を撮影していただきました。



(左:岡、右:ウォーリー木下氏)

第2部：稽古場風景拝見

インタビューが終わった後、稽古場をのぞかせていただけることになりました。

恐る恐る入ってみると、役者さんがチラホラとスタンバイされていました。舞台は、段差調整ができるもので、一風変わった感じがしました。

役者さんとウォーリー木下さんとで、表現に関する考え方が違ったようで、その調整をされていました。こういうことの積み重ねで、演劇は完成していくのだなと思いました。

また、舞台の段差のことも、意見交換しつつ、稽古はなされていきました。

現代演劇レトロスペクティブで広報を担われている尾崎さんと話をしながら、しばらく観ることが出来ました。本番との比較を楽しみたいです。

(了)



私の本棚より



[ここでは安部公房に関する新刊はもとより、旧刊でも、感想や批評を、また愛着のある書、自慢の逸品、などについてのエッセイを掲載していき、ファンの交流の場になれば、と思います。皆さまも今一度ご自分の本棚を見回して、これぞという本を取り上げてぜひご紹介くださいませ。写真画像（著作権に注意）の添付も歓迎です。]

『ユリイカ』

(平成6年8月1日発行)

タ克蘭ケ

『ユリイカ』（平成6年8月1日発行）は安部公房死後の翌年（1994年）に、特集を組まれた号です。



ここにその目次をそのまま写します。

安部公房／N・S・ハーディン(インタビュー)

安部公房との対話

安部公房

光景(写真集)

*

リービ英雄／島田雅彦(対話)

幻郷の満州

今福龍太／沼野充義(対話)

クレオール文学の創成

——脱帰属するテクノロジー

巽孝之／久間十義(対話)

アヴァン・ポップの故郷

——テクノロジーとしての文学原基

*

埴谷雄高

吉増剛造

池内紀

粉川哲夫

眞鍋呉夫

鈴木志郎康

真能ねり

谷川渥

ト・ハッサン

野阿梓

渡辺廣士

難波弘之

竹内統一郎

石井聰互

鈴木和成

内野儀

新戸雅章

八角聡仁

*

これらのどの文章、どの対談の言葉も、実に生き活きとしていて、安部公房の姿とその文学の本質を、その論者の様々な視点から言及し、実に味わいの深い一冊、一号となっています。

実は、この号を入手した動機は、安部公房の『無名詩集』を当時の、そして今でも当代の、日本語の詩人達が、どう読むのかということを知りたいと思って、ヤフーオークション（今のヤフオク）で落札したのです。

詩人がふたり、『無名詩集』を論じております。

一人は、吉増剛造、もう一人は、鈴木志郎康です。

今このふたりの寄稿を読むと、本質的に、という意味は、安部公房の詩の言葉の核心を突いているのは、後者、即ち鈴木志郎康だと判ります。

以下、敗戦後の詩人である鈴木志郎康の言葉に耳を傾けてみましょう。

この詩人は、極私的という形容詞を発明し、その形容詞としての（名詞ではないというところが詩人の由縁です。即ち庭であって、母屋ではない。）その言葉によって、自分の詩の全体を或る時期から名付け、そう呼んで、詩作活動をなさった方です。

この意味で、確かに安部公房の核心に、その実存に至り、その至ったところから言葉を発した安部公房という詩人の道を良く読み解き、言い当てた藝術家のひとりです。次のように『無名詩集』を分析しています。

この寄稿の題名は、『言葉に実現された精神的自立の道程—安部公房の初期詩集「無名詩集」について』となっています。

この一文の冒頭に、この詩人が作者と作品の関係を思い煩っていて、前者などどうでもいいじゃないかと思っているということが書かれています。この文脈で安部公房を論じているのです。

この立ち場で論じる安部公房であるならば、外部と内部の交換、即ちその契機、その一瞬に賭ける自己放棄を創作原理としたこの詩人的散文家、散文家的詩人には、実に脈絡の通う、いい立ち位置、いいpositionだと思います。従い、以下の言葉もみな若き詩人安部公房の肯綮に当たっております。そうして、この詩集の最初の詩と最後の詩について最初に言及していることは、誠にその読み方の正しさを示しております。何故ならば、安部公房は、後年の小説と同じく、既にしてこの詩集を構造化して編纂しているからです。

「この詩（筆者註：『笑ひ』という最初に置かれた詩）を冒頭に置いた『無名詩集』は、全体を通して現実への扉を閉じ、作者にとっては現実より遥かに確かな言葉による想像の世界を生み出そうとするときの心情が語り出されたものと受け止めることができる。「名前」は作者を現実に結び付ける。その名前というものを拒否するこの詩集のエピグラフは（筆者註：「私の真理を害ふのは常に名前だった一読人不知一」）、己の内面に生きる者の立ち場から現実の拒否をはっきりと宣言しているものと理解できる。その現実は、若い安部公房にとっては、作家にとっての観念化された現実ではなく、自分が生きている生活的現実そのものだったといえよう。」

「その詩集の最後に置かれた「ソドムの死」という題の散文詩には、一種の修養再生譚が語られている。ソドムに住む互いに愛し敬し合う三人の詩人が自分たちの愛を試そうと修業の旅に出て、（略）ソドムが絶滅する日に再び再会して、三人は合体して「愛そのものである新人」に生まれかわるといっているのである。詩集全体として、行分けの詩を書く事で表現者として内面を自立させ、最後の散文詩で詩人自らが作家に生まれ変わることを予言しているように読むことができる。」

また『孤独より』という題名の11篇からなる詩の「其の二」の全文を引用して、次のように言うのです。この詩は4つの連からなり、その第1連を引用しますので、その詩情を感じて下さると有難い。

「たわやかな日差しが水の影を
悲しんでゐる人々の面（おもて）にすべらせる
幾つもの枝が夫（それ）々の慄きを
その顔から感じて影につたへる」

「「孤独よりの」連作はその後の「其の三」から文語調に変わって行く。ということは、発語意識が現実からはますます遠くなって行くということである。言葉が文語調になると同時に、語られる内容も幼年時の記憶を素材にするというように退行して行く。」

「其の三」は二つの連からなり、その第1連は次のような連となっています。

「木の間散る間に
散りし日ざしを
吾も亦 受けて降（くだ）りぬ
森のはざまを」

「つまり、リルケは若い安部公房に内面という逃避場所があることを教えてただけで、その若い安部公房が書いた詩は、詩という形式に促されて自分の内面に蒔かれていた表現の発語の種子が芽生え出たというものだったといえよう。

「孤独より」の「其の七」は

船べりの 外国（とつくに）の
玉虫色の かがやきの
ゆらゆらの くらげの肌の
行き過ぎし ほの白さ
（略）

といったように、五五、五七調の音数律を整えて書かれているが、この詩の前半の各句に「の」を付けて進めて行く響きは、上田敏訳の「秋の歌」を思い出させる。」

[註]

上田敏訳のヴェルレーヌの「秋の歌」は、次のようなものです。

秋の日の
半^ろ オロンの
ためいきの
ひたぶるに
身にしみて
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
ここかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな。

この寄稿からの引用はまだまだあるのですが、それ以外にも、実に充実した対談もあり、「アヴァンポップの故郷」と題した、巽孝之と久間十義の対談、「幻郷の満州」と題した、リービ英雄と島田雅彦の対談、また安部公房自身にインタビューをしたH. S. ハーディンの「安部公房の対話」など、読み応えのある記事が満載となっています。

安部公房は、日本人には自らを韜晦しますが、何故か外国人には自らを率直に伝える傾向があります。「安部公房の対話」から興味深い箇所を幾つか引用します。

「安部 ポーは、ぼくに書こうという気を起こさせた最初の作家でした。十五歳ごろのことです。」

あれほど隠そうとしたリルケについても率直に語っています。

「安部 なによりも孤独は普遍的だと思います。それは、リルケの基本的テーマであったし、ぼくの中心的問題のひとつでもあります。それでも、事実、これは日本人にとっては新しいテーマなんです。なぜかといえば、生活が都市化されてはじめて孤独の概念が生まれるからです。」

当然のことながら、このリルケへの言及の後に直ぐ、実存主義に関する言及がなされております。10代の安部公房はリルケの徹底的な孤独から独自の実存の認識と理解を学びとったからです。

このリルケから学んだ孤独の有り様が、安部公房の、言語の視点から観た、実存であること、そしてこのことが文明の都市化に限らず、どのような問題、それがアメリカ論であれ、クレオール言語論であれ、また各種の藝術活動分野であれ、安部公房にとっては普遍的な、中心の視座であったことを、読者は改めて思い起こすことに致しましょう。

さて、これらの寄稿のうち、真鍋呉夫さんがお書きになった「安部公房の劇的な苦闘 その共産党時代」には、このようなリルケの孤独を骨身に浸みて我がものとした安部公房の、その純真、純粹の核心を言い当てた事実としての貴重な目撃談が書かれております。

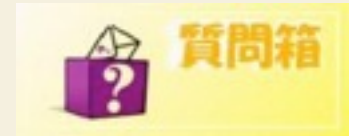
「(略) 安部公房の性格の真芯には、西欧における永遠の孤独者、ラスコーリニコフやカフカの主人公たちとはまた違った、幼児のように無垢で素純な因習外の関係に対する渴望が潜在していた (下線部筆者)。もし、そうでなければ、私に対してあれほど率直に胸襟を開いてくれることもなかったであろうし、進んで「現在の会」のイニシアティブを取るようなことも起こらなかったであろう。」

あなたももし機会があれば、古書店などでこの号を求められては如何でしょうか。



質問箱

—資料など探索依頼と「回答」のページ—



【質問】

『鞆』という作品は、複数あるようです。詳しく教えてください。(W)

【回答】

『笑う月』所収の超短編のもの(安部公房全集23巻、1972年)と戯曲『棒になった男』の第一景(同全集22巻、1969年)のものがあります。前者は、自由を逆説的に描いた作品です。後者は、妻でも開けることの出来ない夫の秘密を描いた作品です。同名ですが、両者に直接的な関係はないように思います。(編集部)

安部公房のアメリカ論

～贗物の国アメリカ～

岩田英哉

目次

1. アメリカは贗物の国

2. 『アメリカ発見』を読み解く

1. アメリカは贗物の国

安部公房が晩年アメリカを論じたいとどこかで発言していて、もっと長生きをしていたら、必ずアメリカ論を書いていたことでしょう。このアメリカ論を読みたかったと思います。

しかし、今こうして考えていても、何故安部公房はアメリカ論を書きたいと思ったのか、それから何故アメリカ論なのか、この理由を一言で言うことができることに気がつきました。

それは、アメリカが贗物の国だからです。

次の二つの意味で。即ち、

1. 国自体として贗物であり、また、
2. その国の作り出すものが贗物ばかりである国であるからです。

国そのものも含めて、贗物に溢れた国。これが、安部公房の視点で観たアメリカなのです。

この視点で、もう少しアメリカという国を考えてみましょう。

アメリカは、その建国の最初は、インディアンを大量虐殺して、その歴史の上に成り立った国ですし、また、アフリカから黒人を攫（さら）って来て、売買をし、奴隷貿易とその上に立った経済で莫大な富を築いた国であり、そうして、そのようなアメリカの白人種が、その罪深い、残虐な前史を忘却し、その忘却の上に成立した全く新しい国家です。

という意味では、この地球上に今あり、嘗てあったマルクス主義の共産主義と、国家を建てることについては、同じ考えの上に建てた国家だということになります。

それは、はい、何月何日にそれまでの世界とは全く別した、新しい国ができたのです、それ以前の歴史は在りませんというものの考え方において、共通しています。この一点に於いて、アメリカという国は、共産主義国家です。（アメリカという国は、自国の成り立つ前史を、すべての共産主義国家がそうであるように、否定することはあっても、決して正視し、直視することができません。）

その共産主義的な国家の成り立ちを宣言したものが、1776年7月4日の独立宣言（The Unanimous Declaration of the thirteen United States of America）ということになります（Unanimousの下線部筆者。全員一致の全員とは何か？誰の事なのか？誠に自分勝手に恣意的なunanimousです。この国家に外側はありません。）。

普通、自然に生まれた国家、即ち、アメリカのように人造の国家、人工的な国家ではない、その国の民族の神話とそれに由来する歴史を有する普通の国家は、そのようにものを考えません。その国の神話と歴史を尊び、大切に、その国の今があるでしょう。

こうしてみると、アメリカという国の民主主義という政体も、その思想も、人造国家の政体であり、人造国家の思想だという意味では、贋物の政体、贋物の政治思想だということが言えるでしょう。

そして、当然のことながら、ヨーロッパの世界の民主主義の贋物でもあるわけです。ヨーロッパとの歴史的な連続性をも、その絶縁を宣言することによって、成立した国であり、従い、アメリカは、ヨーロッパの資本主義と民主主義（これらは表裏一体の関係にあります）の鬼子です。

これは、このアメリカという国を治めている権力の正当性の根幹に関わる大きな問題です。（宣言するだけで、果たして建国が出来るものでしょうか？できません。その建国を認める主体が外になければならない。それ故にアメリカは自国以外の諸国にその贋物の民主主義を説き、押し売り、あまつさえ歴史ある国の国家元首を殺害するのです。）

アメリカという国は、誰からどんな建国の権力の正当性を歴史的に授かり、保証されて、成り立ったのか。アメリカという国は、このような国の在り方そのものを、この問いそのものを否定する国家なのです。（このことは、間違いなく、アメリカという国の外交政策に現れています。）

自国の歴史に相対して向き合い、それを直視出来ないものは、外へ膨張する以外にはありません。これは、マルクス主義を始めとする共産主義国にも共通の特徴です。

アメリカは、東海岸から西海岸に至り、更にハワイの王国を侵略し、更に日本の国に2発のそれぞれ種類の異なる原子爆弾を広島と長崎に実験的に投下して日本人を大量虐殺し、更には、ベトナムを侵略し、そして、ここで敗北してアジアでの軍事侵略的な進行は、やうやく頓挫したように、見えます。

自国の権力の正当性を海外の侵略によって証明しようという意志が、アメリカという国にあることは否定できません。

また、ヨーロッパの白人諸国には、それぞれの神話があるのに対して、上述の建国の成り行きから言って、アメリカには、古代の、そして中世の神話の世界はありませんし、そもそも持ちようがありません。

これが、例えば、日本の国のように古事記や日本書紀を持ち、伊弉那岐命（いざなぎのみこと）、伊弉那美命（いざなみのみこと）や天照大御神やその他の八百万の神々を有し、それぞれの神社を有する日本の国（すべての神社の統帥者、祭祀者は天皇陛下です）とは、本質的に、決定的に、異なることです。

逆にいいますと、これから論じますが、アメリカ人の白人種は、そのような神話を無意識に、強烈に、求めているのです。何故ならば、このようなアメリカという人工国家について、それ以外の国とを比較して考えて見ると、国家が成り立つには、やはり神話がなければ成り立たないからです。

それから、神話に根差した宗教がなければ、国として、その国が成り立ちません。従い、やはりキリスト教は必要とされ、確かにアメリカの大統領は、就任時には聖書に手を置き、神に誓って、政治を始めるのです。宗教と政治は不可分です。

さて、宗教は、政治と共にあるとして、しかし、神話の無いアメリカという国では、またアメリカ人は、それを意識していなくとも、無意識の裡に、神話を心底欲しているという状態にある以上、一体どうやってその渴望と憧憬を満たして来たのでしょうか。

アメリカ人は、こころの底では、古代に通じる国とそこに生きる人間たちに関する神聖性、the holinessを欲しているということです。そのことを、アメリカ人は、無意識に知っているのです。大東亜戦争で日本と戦ったアメリカとい

う国は、この日本の国の神話を欲し（神武天皇の建国から数えても当時皇紀2600年という、アメリカにはとてもあり得ない日本の長い歴史）、それ故に、それを憎んだかも知れないという仮説を立てることができます。

この欲求、渴望、渴仰、憧憬が、アメリカ建国の独立宣言によるアメリカ前史の罪深い残酷な忘却と、やはり分ち難く結びついているのが、アメリカという国なのです。

即ち、歴史の忘却によって自己を喪失し、自らの神聖性を回復し、何かを創造するということです。この神聖性の回復は、自己喪失による忘却によるということから、同時にそのとき、アメリカという国家もアメリカ人も、無名性という性質の烙印を必然的に押されることとなります（この烙印を一体誰が押すのでしょうか。やはり、それはGodなのです）。この必然性を、アメリカ人は求めているのです。

神聖性を回復する事と裏腹な関係にある、この無名性という性質が、アメリカ文化の特質です。

さて、ここまでこの考察を進めて来て、安部公房の読者には、このアメリカという国の神聖性、聖性の回復は、安部公房自身の考え方にとってもよく似ている、いや、全く同じように通じている安部公房の態度（と、安部公房ならば言ったことでしょう）、言語の世界で真理に至る方法としての態度に、全く通じていることを想起するでしょう。

10代で、リルケの詩と、特に『マルテの手記』を耽読し、その創造の方法を自家薬籠中のものとした安部公房は、20歳のときに『詩と詩人（意識と無意識）』を書いて、その創作の方法論を確立しました。この論文にある通りに、詩人は、外部と内部の交換（次元展開）によって、即ち、自己を積極的に喪失して、深い忘却を経験し、そうして、無名の自己（言葉によって名付けられる以前の自己、即ち10代半ばの安部公房の認識した実存の概念、未分化の実存）に立ち戻り、この状態に徹し、その無限回数の次元展開、次元変換の果てに、忘却された現実の諸要素を、時間を脱却して思い出す（想起する）という行為によって再構成して、全く新しい現実、即ち第三の客観を観るに至る、究極の反照を観るに至るといふこの安部公房の思想に、アメリカという国の在り方と、アメリカ人の在り方は、全く同じなのです。

わたしの考えでは、安部公房が何故若年の折から晩年に至る迄、アメリカという国に関心を持ち続けたのか、安部公房が生きていたとして、何しろ自分自身のこころのことでもありますし、果たしてここまでのことに気付いたかどうかは解りませんけれども、これが、安部公房がアメリカという国とその文化とその産み出した文物に関心と興味を持ち続けた隠れた唯一の理由なのです。

自分の思考にぴったりの国が、アメリカだったのです。

〔註1〕

この思考は、そのまま、晩年の安部公房のクレオール論の根拠になっております。安部公房という藝術家は、その表の活動は実に多彩であります、その裏にある思考は、単一であり、単純であり、結局は、リルケとニーチェを読み耽って至った、10代の少年の認識し、理解をした実存の概念、即ち未分化の実存という概念に戻るのです。

『錨なき方舟の時代』という対談で、安部公房は次のように述べています（全集第27巻、167ページ下段）。1984年。安部公房、60歳。

「—安部さんが戦中、ハイデッガーとかヤスパースとか、そういうものを非常に熱中してお読みになったということと、文学へ進んでいくこととは関わりがありますか。

安部 あったと思う。実存は本質に先行するという実存主義の基本概念、本質というのは一つの規定観念であり、その規定作業の前にもっと未分化の実存が先行しているという考え方、それがなぜぼくにとってそれほど重要な思想だったかということ、やはり戦争中だったからだと思う。」

この、実存とは未分化の状態であるという考えは、安部公房の独自の実存の考えです。大東亜戦争敗戦後の日本に実存主義が流行しましたが、ほとんどの人間は、ただ「実存は本質に先行する」というお題目を唱えただけで終わりました。しかし、10代の安部公房はこの考え方の本質を、そのリルケ理解と合わせて軌を一にして、言語表現との関係で、実に深く、本質的に理解をしておりました。それが、「未分化の実存」という考えです。

安部公房は、この実存の場所、未分化の人間個人のありかた、これを場所と呼べば、この場所から終生離れることをしませんでした。

この安部公房独自の実存の概念が、安部公房の諸作品の秘密の部屋を開ける、敢えて言えば、存在論的な鍵なのです。

クレオール論については、安部公房は、『クレオールの魂』というエッセイの中で、次のように語っています（全集第29巻、374ページ）。1987年、安部公房43歳。

「ピジン崩壊のあとのクレオール再生も、事情は似たようなものだったはずだ。伝統もしくは儀式の喪失は、教育意欲ないしは能力の低下を伴う。」

ここで、安部公房が理想の言語、即ち過去の歴史を持たない、伝統や儀式とは無関係な孤児同然の子供達が集まって産み出す言語を夢想しているのです。この理想の言語の産まれる場所は、上で述べた、個々人の人間の、禅でいう未生以前のわたくしという、未分化の実存であるのです。そのような実存を無意識にでも知っている子供達の集まりから産まれる言語、それが、

安部公房の夢想したクレオール語なのです。それは当然のことながら、自分を産み出した歴史の喪失とともに、自己を喪失し、苦しみを経て、その嘗ての過去の諸要素の蘇りの変形された全体を、過去の時間を振り返る思いの中では全然なく、そうではなく、時間を捨象して眼前に現れる第三の現実（第三の客観）、これが、クレオール語の創造する現実なのです。

さて、そうして、このような忘却による自己喪失は、自己の無名性の在り方と相俟って、平気で、平然と、贋物を産み出すのです。この場合、贋物という言葉の意味は、普通ひとが表立って考えるよりも、ずっと深い意義と意味を持っております。安部公房の創作活動が示しているように。

この自己喪失と忘却と神聖性の恢復と無名性は、そのままアメリカ人の無垢の幼児性の生まれる基（もと）となっておりまして。そして、この無垢の幼児性、無垢の児戯性が、そのままアメリカという国の産み出す文物の贋物の、わたしたちに抗し難い魅力の源泉となって、世界中に広まっております。

これはまた見方を変えると、親（ヨーロッパとその主要国）の居ない孤児（アメリカとアメリカ人）の姿です。安部公房は、アメリカに親の居ない孤児の姿を見ていたのです。これは、そのまま安部公房の小説の主人公達の出自、否、出自の無さに通じております。

そして、このようにアメリカという国について考えて参りますと、逆に、安部公房が方法論的な自己喪失の果てに獲得しようとしたものが、実は、そのような無名の孤児としての人間の、無垢の幼児性に通じる、愚かな人間の神聖性であったということになるということです。

うらぶれた、乞食同然で係累や家族のない、安部公房の無名の主人公達の結末は、いつも死の気配が濃厚ですが、ここに同時に、その主人公達の獲得するこの何か愚かしいほどに無垢な神聖なるもの、神聖であるということ、自己の生命と引き換えにしてでも手に入れたいと思ったこのことを思ってみることは、無駄ではなく、それどころか、大いに預かってその諸作品を読み解く鍵ではないかと、わたしは思います。

さて、少しばかり大上段に構えた一般論は、これまでとして、安部公房がアメリカを論じていたならば、個別に何をどのように論じたか、その各論に入りたいと思います。

安部公房が生きていたならば、アメリカ論に入れて論じたものに、次のようなものがあるのではないかと想像します。

1. 都市（町）
2. ディズニーランド
3. コカコーラ
4. カウボーイ
5. ジーンズ
6. ハンバーガー
7. ジャズ
8. インターネット

これらも、例外無く贗物です。

それでは、これから、これらの物が一体何の贗物なのかについてお話します。

アメリカの都市と町という町は、自然発生的に生まれなかった、人工的な贗物の町です。アメリカの土を踏んだ方には、それは納得されることでしょう。それは、ほとんど、人工的な、建築物の様式を含めて、ヨーロッパの町と建築物の贗物です。

ラスベガスという町が、その典型的な姿を示しています。

ラスベガスに行けば、この砂漠の上に建てられた人造の町が（何しろ道とその他の土地のあちこちに散水の仕掛けが施してあり、定時的に散水する人工施設の上になりたっている）、どのように子供じみた町であり、世界であるかを目の当たりにするでしょう。ラスベガスもディズニーランドも同根の町です。これらの町に典型的なように、アメリカの町はみな人造であり、人工の町です。日本の町のように、お城の周囲にできたとか、寺の前にできたとか、そういう意味では、人間の住む自然の地形や人間の自然の感情からできたというような町ではありません。

面白いと、わたしが思ったのは、あるときラスベガスへ行って、あるホテルに宿泊したときに、その巨大なホテルの中に、ニューヨークの町を小さく模型のように再現した一画を、宿泊客の娯楽のために作っていたことでした。

何しろ、ニューヨークの地下鉄の電車が、乗客を実際に乗せて、頭上高い天井の当たりを轟音を立てて疾駆するのです。

ラスベガスという贗物の町に、贗物のニューヨークを再現したという、この二重の愛贗（あいがん）性は、全く屈託がありませんでした。

或いはまた、古代エジプトのピラミッドとスフィンクスまでを再現したLuxorというホテルもあります。ピラミッドの中にホテルの客室があるのです。

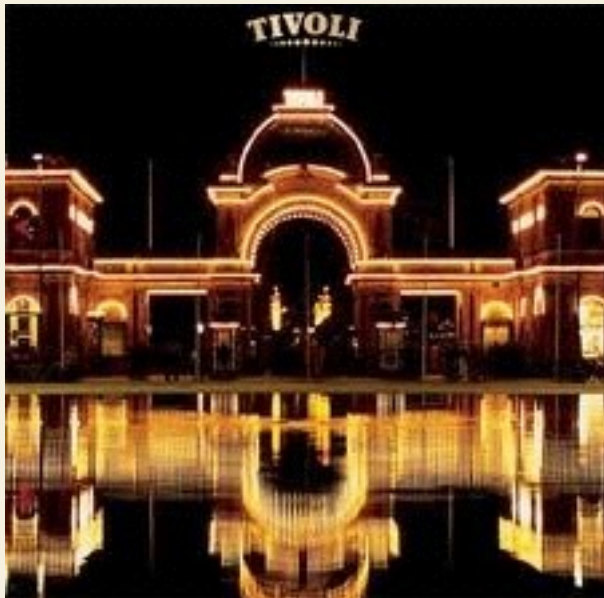


さて、ディズニーランドの話です。



ディズニーランドは、デンマークのTivoliの贗物です。それは、実にディズニー的な空想の世界に換骨奪胎されておりますけれども、祖型は、Tivoliだと、わたしは思います。これは、近世の、ヨーロッパの白人種の博物館的な、百科全書的な収集の産物のひとつです。

大きな敷地の中に、Chinese Garden, English Gardenといったように、様々な国のお庭があり、それぞれの建築物も建てられていて、また音楽も演奏されているなどして、食事ができ、実に楽しく時間を過ごし、その庭園の一つ一つが経験できるようになっています。



これと同じものに、百貨店と日本人が翻訳した、イギリスのHarrodsのような、department houseがあります。様々な世界中の白人種の植民地から輸入された商品を並べている様々なdepartments（商品の部門）からなる店です。

この子供じみたディズニーランドに、アメリカ人がどれほど熱狂的に惚れ込んでいるか。

わたしは、Dan Kennedyという有名なアメリカのマーケターの会員になって、その月刊誌を購読したことがあります。そこに、この有名な、という意味は典型的な、お金儲けについての智慧と知識と経験を持つ男子が、或る時、この週末は奥さんと一緒にディズニーランドに行くのだと（多分フロリダのディズニーランドでしょう）ということを書き、それが如何に楽しいことか、胸のわくわくする期待に満ちたものかを、数行の内に実に活き活きと書いていて、わたしは驚いたことがあります。

それは、日本語圏の言葉で言えば、まさしく病膏肓に入ると言うべき程の状態を表す、ものの言い方でした。もう無条件に、盲目的に、ディズニーランドは素晴らしく、楽しい、掛け値無くお金を払ってでも行くべきところ、いや、お金のことすらも忘れてしまう、そのような場所だという書き方でした。

この専門家は、年齢にしてもう70歳になろうという人間ですから、そうして奥さんも同様の年齢なのでしょうから、アメリカ人にとっては、この無垢の幼児性、手放しの幼児性は、全く強烈な魅力を以て働きかけるものと見えます。ちなみに、わたしは一度もディズニーランドには行ったことがありません。

次は、コカコーラです。

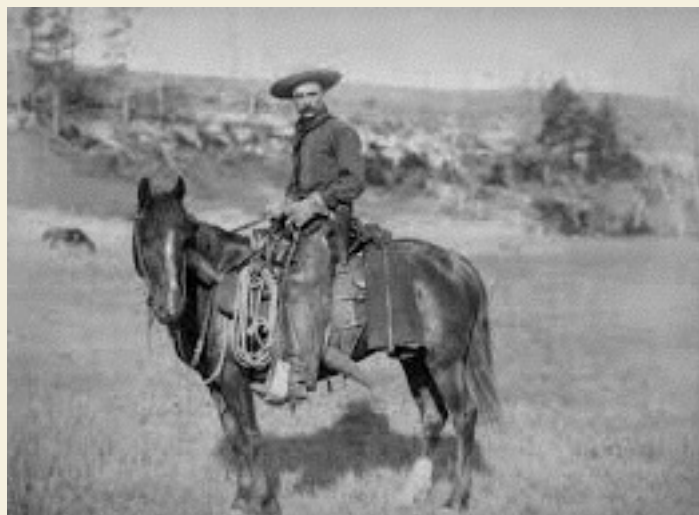


わたしの考えでは、コカコーラというのは、ヨーロッパの世界にある神話的な泉の贗物です。ヨーロッパの中世の物語に出て来る泉は、そこには泉の精がいたり、怪奇な生き物が番をしていたりする、神聖な場所です。そして、絶えることなく、清水が湧き出る。

コカコーラは、その意匠はアメリカという国らしく、知的財産権という法律的な名前で保護されている企業秘密であり、その製法は秘匿されて、つまり贗物の神聖性の上であって、誰も近づくことができないという舞台設定になっています。

その秘密の水を、アメリカ人たちは毎日飲んで、喉の飢えを癒しているわけです。ヨーロッパならば、中世の姿をした町の中に、今でもある尽きせぬ泉の水の、その贗物というわけです。

その次に、カウボーイを見てみましょう。



カウボーイは、ヨーロッパの世界の、旧約聖書の古代にまで遡ることのできる、羊飼いの贗物です。この贗物も、やはりヨーロッパや中近東の世界の聖性の贗物ということになります。

そのような憧憬を根源的に持っているアメリカとアメリカ人が、21世紀の始めに、空から攻撃されて、その資本主義の牙城ともいべき金融資本の二つの塔たる高層建築物を、中近東の人間によって破壊されたということは、普通ひとが考える以上の意味があるのではないかと、わたしは、このように考えて参りますと、思います。

ジーンズは、一体何の贗物なのでしょうか。



これも、アメリカの建国に関係があるでしょう。ジーンズというアメリカ人の発明と、何故それがアメリカに広まり、また世界に広まったのかということを見ると、以下のようにになります。

英語のWikipediaを参照しました。 : <http://en.wikipedia.org/wiki/Jeans>

これによれば、19世紀後半のアメリカで、カルフォルニアのゴールドラッシュの時期に、正確には1873年にJacob DavisとLevi Straussにより発明されたとあります。

これを一着に及んだのは、カウボーイと鉱夫でした。この場合、後者は、一攫千金を夢見る金の発掘者ということになります。

さて、このジーンズをはくということは、前者、即ちカウボーイという、古代の聖書と神話の世界の羊飼いの贖物に脈絡が通じ、その聖性（と、それ故の無名性）を享受できるということであり、後者、即ち、金の鉱夫になるということは、一攫千金のアメリカン・ドリームを体現することになるのです。

このふたつの形象（イメージ）の備わったズボンが、ジーンズです。

これは、アメリカ人に受けることでしょう。それは、羊飼い、放牧、その自然の中にいる動物の、移動する管理者という自然の中の形象を感じさせることと、またその飾らなさが、無名の者の一着に及ぶ労働着が、従って既存のヨーロッパの確立した格式から逸脱し、これを否定し、同時に、一攫千金という個人の夢をそそるわけであるからです。この無名の人間の形象を、世界中の人間が、ジーンズをはいて、共有しているというわけです。

何かを忘却し、自己を喪失する代償に、神聖性を獲得する。自己を喪失するとは、無名に生きることであり、無名性という神聖性を獲得することなのです。（普通、人間は、喪失をではなく、所有のことばかりを考えて生きているものです。）ここに、アメリカ人の無邪気な善意の根源、無垢な幼児性の根源があります。ディズニーランド！

[註2]

わたしは、社会に出てアメリカ人と仕事を一緒にする機会がありましたが、あるとき、そのエンジニアが、自分は兵役に服して、フランスに行って軍務を経験したことがあるが、何故フランス人にあんなに嫌われるのか全く理解ができなかったといっている言葉を覚えております。

このとき、この特許を取る程の発明家であるアメリカ人は、フランス人に対して、いやわたしはフランスの羊飼いと同じ人間なのだもし言ったとしたら、意思疎通ができ、こころが通じたのではないかと、こうして今思います。

アメリカ人は何故いつも何を忘却するのでしょうか。それは、自分の罪、即ち、インディアンの虐殺であり、アフリカから黒人をさらってきて、売りさばき、奴隷として酷使して、莫大な富を築いたこと、更には、これらのことの上にアメリカという国があるということ、このことに対する罪を忘却するということなのです。それから、この忘却されることの中には、ヨーロッパの歴史との絶縁によって、ヨーロッパの歴史というものもあるのです。

しかし、この4つのこと、即ち、忘却、自己喪失、無名性、神聖性の獲得、従って普遍性の獲得の間には、生き生きとした感情があるのです。人間というのは、なんとという残酷な生き物だろうと、わたしは思います。

そうして、わたしは、アメリカ建国当初の、Washington Irvingという作家の書いた『Sketch Book』に所収の作品の持つ、美しい文章を否定することはできません。

さて、ハンバーガー。



ハンバーガーは、その名前の通り、ハンバーガー・ステーキの贗物です。それも、手軽に食べられる贗物です。ということは、またヨーロッパのサンドイッチの贗物ということにもなります。何よりも、そのHamburgerという名前からして、ドイツ人のステーキの贗物なのです。

イギリス人の創作したサンドウィッチは、その名前の通りの伯爵という貴族の創作した、賭け事の合間に食べるための手軽な食物でありましたが、アメリカ人の作った贗物のサンドウィッチは、その贗物性の由来からして無名の者の、誰でものための、それ故に普遍性のある贗のハンバーガー・ステーキであるということなのです。

しかも、その食べ物が、junk foodと呼ばれ、junkが屑、廃品、瓦落多という意味であることからして、実に安部公房好みです。

わたしは、しばしばドイツに行くことがありますが、しかし、ドイツで一番安心して手っ取り早く何かを食べて食欲を満たそうとすると、足が自然にマクド

ナルドのハンバーガー・ショップに向いてしまうのです。何故ならば、そこに行けば、日本の東京にあるのと寸分違わぬ店があって、全く同じ食物を提供してくれることが安心して判っているからです。日本にあるアメリカの贋物の食が、ドイツでも同様に贋物であるが故に、同じだということになるのです。これが、アメリカ人の創造した贋物の力であり、魅力です。

他方、敢えてドイツで日本食を食べようとする、果たせるかな、日本料理を謳った店の看板を前にして、その店外に掲示されているメニューと値段を見ながら、果たしてこれは本物の日本料理だろうか、それとも贋物の日本料理だろうか、この高いお金を払うだけの値があるのだろうかと悩むことになるのです。マクドナルドの店では、そんな心配をすることは全くありません。

また、Baseballと呼ばれる、アメリカの国技ともいべきスポーツもまた、同様な事情を、即ち忘却の上の神聖を表して、そこに根差しているのではないのでしょうか。（そして、アメリカ人の発明したスポーツで不思議なことは、アメリカンフットボールというサッカーの贋物もそうですが、何故いつも攻める側と守る側という順序が規則正しく交替するのかということです。本来のフットボール、即ちサッカーは、そうではありません。攻守が絶えず時間の中で流動的に入れ替わります。）そして、チューイングガム。Baseballの選手は、何故チューイングガムを噛むのでしょうか。これについて論じると、アメリカと贋物から少し筋道が外れますので、この主題は、また稿を改めることに致します。

ジャズ。



白人のジャズは、黒人のジャズの贗物であることは論を俟（ま）たないことでしょう。

嘗て、『Roots』という黒人作家、アレクسس・ヘイリーの書いたnon-fictionが、アメリカでベストセラーになったことがあります。

それは、この黒人が自分の過去の祖先を辿った話で、自分の祖先がアフリカ大陸から白人種に誘拐され、攫（さら）われ、囚（とら）われて、売られて、アメリカ大陸にやって来て、どのように生きて来たかという一族の祖先の話です。

この伝記的な黒人の話を、当時白人種のアメリカ人は、熱狂的に読みました。

この話の受容の仕方には、アメリカ人がジャズを受容したのと同じ経緯、同じ経路を見る事ができるのではないかと、わたしは思います。

このアメリカという国の贗物性が、その歴史の何か残酷な忘却の上になりたっているからではないかという仮説を考えると、その受容の仕方がわかります。

白人種のジャズという音楽も、これも、アメリカ人の奴隷貿易の罪の、無垢な忘却の上に成り立っている音楽だという意味では、建国の事情と軌を一にしています。つまり、アメリカ人（白人種）にとっては、この意義と意味に於いて、罪滅ぼしの無垢の、従い（皮肉でも逆説でもなく）神聖なる贗物の音楽というわけです。



インターネットは、言う迄も無く、現実の贗物、贗の現実です。

アメリカ人が現実の世界ではもはやなりゆかずに、仮想現実の世界に打って出て開拓した、西部のフロンティアです。これも、アメリカ人にとっては、西部劇の世界なのです。いや、やはりアメリカ大陸の西部まで行き着いたアメリカ人がその先の海へと航海に出帆したという形象（イメージ）なのかも知れません。初期に生まれたインターネットの用語には、サーフィンという言葉を始め、海に関する用語が幾つもあります。

また、こうもいうことができます。

その国の出自からいって、アメリカは共産主義国家である以上、外に膨張することを止めることができない。この現実の世界では東へ東へと、フロンティアを求めて、行く所まで行ってしまったので、今度は仮想現実の世界に膨張を始めたということになります。

Wikipediaを見ると、アメリカがベトナム戦争で、その（結果として侵略の頓挫する）東漸を始めたのが、1960年12月 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/ベトナム戦争>)。インターネットの前身の「ARPANETに直接影響を及ぼした概念であるJ・C・R・リックライダーのタイムシェアリングシステムが発表され」たのが、同じ1960年ということで (<http://ja.wikipedia.org/wiki/インターネット#.E6.AD.B4.E5.8F.B2>)。

この事実は、非常に示唆に富んでいると、わたしは思います。

この場合、膨張を侵略と言い換えてもよいでしょう。それは、どのような侵略であるかといいますと、このインターネットの技術の出自は、もともとアメリカの国防総省（ペンタゴン）の発明になるものだからです。従い、最初からこの技術の公開には、アメリカという国の政治的、軍事的な理由と目的が伴っていると考えられます。即ち、これは消極的な、negativeな、裏返しの軍事的な世界制覇なのです。

そして、今や、その通りになったのではないのでしょうか。このインターネットの世界は、あっという間に世界中を席卷して、当初の期待を裏切って、仮想現実の戦争をやはり惹起する、攻撃と防御の世界であり、実際にその様相を呈している以上は。

インターネットは、コカコーラであり、ジーンズなのです。いつでも、どこでも、誰にでも、普遍的に有り、通用するのです。

逆に言いますと、コカコーラとジーンズのあるところ、いつでも、どこでも、平等に、即ち人種、民族、国家を問わずに、争いが起きるということになります。

さて、こうして見ると、インターネットは、現実世界の贗物として、それはあり、同時に、アメリカ人らしい一攫千金の夢（アメリカン・ドリーム）と、贗の羊飼いの世界です。

インターネットを軍事技術から民間技術へと転用し、拡張することを考えたとき、アメリカとアメリカ人は、何を忘却したのでしょうか？インディアンの虐殺や、奴隷貿易による黒人という人間の売買に匹敵する罪を忘却した筈です。それと引き換えに、人間としての単純、無垢な神聖性と幼児性を手に入れるために。

無垢なる幼児性こそが、アメリカ人にとっての救済なのです。

この場合、アメリカという国がそうやって手に入れた無垢なる幼児性、即ち無垢なる神聖性とは一体何か？他の贗物を創造するときと同じ性質の神聖性であることは間違いがありません。それを、一言で何と言えよいのでしょうか？

と、このように考えて来ると、やはり、それは、人間の無名性であるということになります。それが、インターネットの個人の世界です。その世界では、わたしたちは、人種も民族も越えて、実際、普遍的に無名になることができます。それほどに、アメリカ人は、無名の個人の神話を、神聖なるものを渴仰しながら、求めているということになるでしょう。

さて、この章の最後に、スティーブ・ジョブズの話をしてしましよう。

安部公房は、スティーブ・ジョブズについては言及しておりませんが、上に考えたのと同じ考え方で、その人物の持つ深い意味を知る事ができます。

同じ問いを立てることにしましよう。

スティーブ・ジョブズの創造したものは何の贗物でしょうか？

Appleという社名は、やはり、旧約聖書にあるアダムとイヴのあの林檎の、あの神話の話の名前による命名だと考えることができます。そして、Macintoshという種類の林檎の名前をつけたことが、スティーブ・ジョブズの独特の感覚です。

スティーブ・ジョブズ自身が、私生児として生まれ、里子に出されて、その人生を、自分自身のルーツの、祖先の脈絡の喪失から、その忘却から始めなければならなかったということが、アメリカという国の成立ちに通じているのです。スティーブ・ジョブズは、親の居ない、みなし子であり、孤児です。（安部公房の小説の主人公達と同じです。）これは、典型的なアメリカ人の姿のひとつだと思います。それは、神話の羊飼いの贖物、即ちカウボーイにもそのまま通じています。



ジョブズの人生は、その喪失を乗り越え、自分自身のあるべき人生を思い出し、創造する人生であったということです。それを、最後にはインターネットというフロンティアで、仮想現実という、現実の贖物の西部で実現したことが、誠に象徴的であると、わたしは思います。

Appleという禁断の実を名前としたこの会社は、仮想現実という贖物としての西部のフロンティアの開拓をした会社なのです。智慧の木の実を喰らって、知ること、即ち忘却を思い出すということをした男女が楽園から神によって追放された神話を担った、その意味では、ヨーロッパの神話の世界に通じる名前を担った会社。しかも、Macintoshというその林檎の名前をパーソナルコンピューターの名前にした会社。

他方、ビートルズというイギリス人のロックバンドの設立した会社が同じAppleであり、法的な係争をするに至ったということは、アメリカ人の故郷のひとつであるイギリスと、そのような故郷に絶縁を宣言し、積極的に故郷を

喪失したアメリカ人との間に、利益が相反して戦うという否定的な関係として、ヨーロッパとアメリカの間に互に通ずる何かを示しているのだと思います。

しかも、ジョブズの夢は、それまでのアメリカンドリームと違って、単純な一攫千金の夢の実現ではありませんでした。即ち、経営者としての給与所得が1ドルであるように、禅にあるような無一物の世界を志向し、また同時に美的な感覚を大切にすることで、日本人に相通じるものがあると思います。そのようなアメリカ人であったということにおいて、ジョブズは、アメリカの国では、単純なアメリカン・ドリームの体現者ではなく、特異な存在であると思います。アメリカ建国初期のソローという人の思想との比較は可能であるかも知れません。アメリカにも隠者の思想はあるようですから。

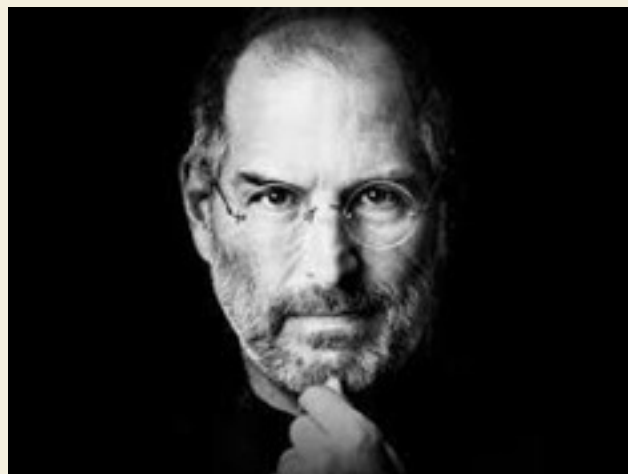
もう一度、スティーブ・ジョブズについての最初の問いに戻ります。

スティーブ・ジョブズの発明は、何の贗物なのでしょうか。

インターネットの特性、即ち、無名な個人の神話を求めるところに訴求した、携帯可能な贗物の道具。いや、玩具というべき道具です。

iPodは、インターネットという贗の現実の中にある、可搬可能な贗のステレオ。iPhoneは、同様の現実にある、可搬可能な電話とパーソナル・コンピュータの贗物。コーラやジーンズのように、いつでもどこでも携帯可能な道具です。

(しかし、このようにスティーブ・ジョブズの創造した贗物のことを理屈で説



明しようとしても、余りうまく行かないという気持ちがあります。Macintoshは、スティーブ・ジョブズの独創ではありませんし、それはゼロックスのパロアルトにある研究所で、Allan Kayのチームの創造した発明であります。とはいえ、やはりMacintoshは独創的な商品であると思わずにはいられません。(スティーブ・ジョブズは独創的な商品を発明したのだと、わたしは思います。)

要点は、いつでもどこでもという、個人の無名性に由来する普遍的な可搬可能性が、これらの玩具にはあるということなのです。

これらの製品は、単なる大量生産品であるもの以上になっております。上に述べた人生を持つスティーブ・ジョブズの、自己喪失した無名の個人の神聖性に対する無欲な憧憬と美意識が、その根底にあるからです。

その眼でiPadをみると、古代ローマ時代に全くそっくりなタブレット（蠟板）があります。しかし、古代ローマのタブレットは限られた階級の人士の使用したものでしょう。iPadは、自己喪失を経験し、神聖性を回復したアメリカ人の創造した、無名の個人にこそ相応しい玩具です。そして、このような由来を持った玩具が、この古代世界のタブレットの贗物というならば、いうことが、出来るでしょう。



さて、このように、贋物のアメリカとそのアメリカの産み出した贋物を考察して来て、以上の仮設を基に、次の章では、1957年、33歳の安部公房が書いた『アメリカ発見』（全集第7巻、434ページ）と、1964年、40歳の安部公房の書いた『モスクワとニューヨーク』（全集第19巻、58ページ）というエッセイを、読み解くことにしましょう。

（続く）



もぐら通信の編集部員を募集します

編集部

新たにもぐら通信の編集者を募集致します。募集の要領は、次の通りです。

1. 募集人員

1名

2. 募集要件

- (1) 安部公房が好きであること。
- (2) 編集方針を大切に下さること（*）。
- (3) 無給であることを承知下さる事（逆に毎月2000円程度の持ち出しになります）。
- (4) 無償の奉仕ができること。

（*）【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。
2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。
3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。
4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

3. 編集部員の仕事

- (1) 校正、校閲、査読
- (2) 寄稿者とのコミュニケーション
- (3) もぐら通信を印刷し、配付（メール便等）する業務（掛かった費用は後日、各編集者が均等な負担金額になるように精算をします）
- (4) 原稿の執筆
- (5) その他のもぐら通信の編集と発行に関するすべての業務

4. 募集対象者

- (1) 年齢：不問
- (2) 性別：不問
- (3) 人種：不問。日本語が十分にできれば人種を問いません。
- (4) 住所：国内海外を問わず。

5. 要求される能力

- (1) PCのスキル：普通にPCが使えること。OSは不問とします。
- (2) アプリケーションのスキル：ワード、エクセル、OpenOfficeの初級程度の操作
- (3) もぐら通信を印刷し、配付すること。
- (4) 編集部の資産とも言うべきDropbox中の書類群を閲覧し、処理する権限を賦与されますので、相応に注意深く、思慮あること、常識あることが求められます。
- (5) 企画ができれば尚よし、です。

6. 応募先

- (1) 宛先：岩田
- (2) 電子メールアドレス：eiya.iwata@gmail.com
- (3) 件名欄に、「もぐら通信編集部員応募」とお書き下さい。

7. 面接

岩田（タクランケ）がスカイプでの面接を行います。

8. 締め切り

必要な方が採用され次第、締め切ります。



ご寄稿に際してのお願い

編集部

いつも貴重なご寄稿をいただき、まことにありがとうございます。
まず今後の原稿締切日についてお知らせします。よろしくお願ひします。

23号 7/25(金) 24号 8/22(金) 25号 9/26(金)

さて、お届けいただきました原稿のその後の訂正につきましては、編集の都合上、次のようにお取り扱いさせていただきたく、ご了解のほどをお願い申し上げます。

- ・訂正事項を見出された場合、出来るだけ早くお知らせ下さい。
- ・編集上の初版が成った後での語句や表現の訂正依頼は、反映できないことがありますのでご了解下さい。
- ・しかし重要な事実誤認や錯誤の訂正については、可能な限りギリギリまで受け付けます。

以上、何とぞよろしくご協力をお願いします。

前号訂正箇所

第21号に誤植あり、次のように訂正を致します。

1. 『作家と万年筆 安部公房の巻』

P6の最後の行

「のかと言いますと、ひとつには”一本位は国産ものを使ってみてはどうですか”」と

P7の最初の行の

「のかと言いますと、ひとつには”一本位は国産ものを使ってみてはどうですか”」

以上ふたつの一行がページを跨（また）がって重なっておりましたので、これをひとつとして直し、訂正します。

2. 『安部公房の俳句論』

P23の最初の行

「昭和五十七年正月は、グレゴorius歴1982年、安部公房32歳です。」は、

「昭和五十七年正月は、グレゴorius歴1982年、安部公房58歳です。」に訂正します。



読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。一部は要約させていただきました。

メール配信担当：岡篤史

九堂夜想様より

岡 篤史様

いつも「もぐら通信」をお送りいただき誠に有難うございます。
毎回、バックナンバーを読み切らないうちに最新号が紹介されるので、感想送付が追いつかず失礼しております。

先日お送りいただいた第21号も、まだ読了はしておりませんが、私的に俳句関連に携わっている手前、まずは第21号掲載の安部公房の俳句論を興味深く拝読させていただきました。
小説と俳句、ジャンルは異なれど〈詩〉の根幹としての徹底した文学思想にあらためて共鳴した次第です。

また、日本比較文学会第76回全国大会のご案内、重ねて感謝いたします。
スケジュールが整いましたらぜひ足を運びたいと思います。
ひとまずお礼まで。

九堂夜想拝



内藤由直先生より

岩田英哉様 もぐら通信編集部御中

いつもありがとうございます。荒木堅固氏のエッセイ、面白く拝読しました。以前、駒場の日本近代文学館で安部公房の原稿を見せてもらったことがありますが、その時、ペンで書かれた個性的な文字を目にして一人、興奮したことを思い出しました。

作家の筆記具は、なぜか興味を掻き立てるものがありますね。それでは、また次号も楽しみにしております。



感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んだの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思えます。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

ご寄付

匿名の読者の方より、もぐら通信に2000円のご寄付を戴きました。

誠に、ありがとうございます。

謝して、ここにお礼の気持ちをお伝えするものです。

また、これを機会として、もしご寄付を戴けるのであれば、どなたからも広く薄く、よろこんでお受けしたいと思います。以下の口座です。

ゆうちょ銀行

(1) ゆうちょ銀行間の場合

- ①記号 10160
- ②番号 3695511
- ③口座名義人：イワタエイヤ

(2) 他の金融機関からの振込みの場合

- ①店名：〇一八（読み：ぜろいちはち）
- ②店番：018
- ③預金種目：普通預金
- ④口座番号：0369551
- ⑤口座名義人：イワタエイヤ

【合評会】

第21・22号の合評会を近日中に、「もぐら通信掲示板」で開催します。<http://8010.teacup.com/w1allen/bbs>

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、平野啓一郎様、宮西忠正様（新潮社）、富澤祥郎様（新潮社）、北川幹雄様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、日本近代文学館、コロンビア大学東アジア図書館

【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。

2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。

3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。

4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

【個人情報保護に関する方針】

ご登録いただいた個人情報は、厳重に管理し、「もぐら通信」に関すること以外に使用しません。

【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房解読工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://w1allen.seesaa.net/article/398537021.html>

【もぐら通信のwiki】

「ニュース&記録」

<http://seesaawiki.jp/w6allen/>

「もぐら通信総目次・索引」

<http://seesaawiki.jp/w5allen/>



編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

本誌の読者である九堂夜想さんは、俳人であり、「LOTUS」という俳句誌を刊行されています。LOTUS第26号にて、頭木弘樹さんの寄稿があると教えて頂き、さらに献本までしていただきました。俳句とカフカという、一見まるで異なるものに対して、意外な類似性を示し、俳句とカフカ、それぞれの魅力に迫っておられます。LOTUSを入手されたい方は、LOTUS事務局：酒卷英一郎様のメールアドレス宛に連絡してください。

sakamakie@jcom.home.ne.jp

突然ですが、諸事情から、今号の編集・配信をもって、編集部を辞任することになりました。無念さもありますが、今は一種の爽やかさを感じています。これまで支えて頂いた支援者や寄稿者などに厚くお礼を申し上げます。そして、共に闘った「友達」に深く感謝します。こんなこと、そう滅多にできることではありません。編集部を降りても、私が安部公房の愛読者であることには、なんら変わりません。

[wlallen]

●今号のわたしの『安部公房のアメリカ論』の前半が、アメリカという国に対して過激であり、攻撃的だとアレンさんがいうので、話をしましたが、折り合いがつかず、アレンさんが編集部を去ることになりました。残念であり、無念です。岡田さんのときもそうでしたが、淋しい思いです。とはいへ、当面は一人ででも、もぐら通信を発行して参る所存です。変わらぬご声援を戴ければと思います。

●何故か不図、中世ドイツ語の文法書を本当に36、7年振りに読み始めました。何か意味のあることに違いありません。或いは、安部公房のアメリカ論を書いたことがその因を為しているのかも知れません。しかし、中世ドイツ語のテキストに当たると、やはり言葉が美しい。美しい日本語を書きたいものです。散文の美などは今日誰も考えようとしませんが。と言った小林秀雄の深い言葉を思い出します。

●美と言えば、わたしの人生の指針を最近、少質緩美と決めました。これで生きて行こうと思っている今日この頃です。

[岩田英哉]



【編集後記】

今号は、安部公房全集の編集者でいらした宮西忠正さんのご寄稿を仰ぎました。その行間から伝わるのは、如何に若き安部公房が同じ世代の若者達と感受性豊かにポーヤリルケやルイス・キャロルや変身譚を語り、その物語を共有したかということではないでしょうか。

(鈴木秀太郎の書いた『紙片』は、わたしには安部公房の『タブー』(1948年)を思わせるものがあります。)さすがに編集者でなければ書く事のできない安部公房の裏面史、周辺史に感嘆しました。若き安部公房の交流を知る素晴らしいご寄稿に感謝申し上げます。

●多麻乃美須々さんには掌編小説をご寄稿戴きました。位相幾何学的な、安部公房の読者らしい掌編です。お楽しみ下さい。もぐら通信では読者の小説も掲載したいと思っております。我こそはという方、ご応募下さい。多麻乃美須々さんはその先鞭をつけて下さいました。ご寄稿と併せ、二重の意味で感謝です。

●ウォーリー木下さんへのインタビュー。興味深いものでした。ベケットと安部公房は通じていると思います。自覚的には、安部公房は待つという一点を自分とベケットの発想との共通点として、ゴドーを待ちながらについて、言及しております。●アレンこと岡も編集部を辞めて、言葉がありません。

[岩田英哉]

もぐら通信編集部 連絡先: eiya.iwata@gmail.com

差出人:

廣安部公房

〒182-0003東京都調布市若葉町

「閉ざされた無限」

次号の原稿締切は7月25日(金)です。ご寄稿をお待ちしています。

次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. 安部公房のアメリカ論(2) : 岩田英哉
2. その他のご寄稿